

異性の行動から自分への好意をどの程度感じるか

——ソーシャルスキルと自尊感情の影響——

栗 林 克 匡

異性の行動から自分への好意をどの程度感じるか

——ソーシャルスキルと自尊感情の影響——

栗林 克 匡

Yoshimasa KURIBAYASHI

目次

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- 引用文献

[Abstract]

The Effects of Social Skills and Self-Esteem on Perception of Affection from Behaviors that Opposite Sex Acquaintance Shows

This study examined the effects of social skills and self-esteem on perception of affection from behaviors that opposite sex acquaintance shows. A total of 170 university students imagined the situation in which an opposite sex acquaintance tried suggestive behaviors toward participants. Participants were asked about (a) the estimation of acquaintance's affection, (b) their own affection toward acquaintance, (c) their social skills, and (d) their self-esteem. Four types of acquaintance's suggestive behavior were found by factor analysis: "self-disclosure," "approach," "desire to connect," and "proposal and sexual behavior." Main results were as follows: (1) high decoding-skill participants estimated acquaintance's affection more than low ones from suggestive behaviors except for "proposal and sexual behavior;" (2) self-esteem had no effect on the estimation of acquaintance's affection. These results were discussed according to the model of romantic relationship progress.

I. 問題

恋愛対象となりうる異性が、自分に対してとってくる行動から、好意があるのかどうかを正確に見極めることは、恋愛関係を形成するにせよ回避するにせよ相手との今後の関係を調整する上で重要なことであろう。関係の親密化過程のモデルとして、Levinger (1983) は対人関係の変化を、A: 知己になる段階、B: 関係の構築の段階、C: 持続の段階、D: 崩壊の段階、E: 終焉の段階の5段階を想定している。恋愛研究においては、恋愛関係のごく初期の形成プロセスの一つとして、「告白」に注目した研究が行われてきている(菅原, 2000; 樋口・磯部・戸塚・深

田, 2001; 栗林, 2002, 2004a; 橋本, 2002; 中山, 2009; Ackerman et al, 2011など)。恋愛における告白は「恋愛関係の形成を目的として、特定の相手に自分の好意を伝達する行為」(栗林, 2002)であるが、この「告白」はLevingerのモデルのA段階からB段階へ移行するための手続きとして、多々見受けられる。本研究では、「告白」に至る以前の顔見知りの異性間の相互作用に注目する。この異性関係はまだ確固とした関係が形成される以前なので、LevingerのモデルではA段階の途上に相当すると考えられる。そこでは両者が関係をさらに発展させるかどうかの、様々な試みがなされうる。関係の発展を望む個人は、意図的に相手に対して何らかの言語的あるい

キーワード: 恋愛, 好意の認知, ソーシャルスキル, 自尊感情

Key words: Romantic Love, Perception of Affection, Social Skills, Self-Esteem

は非言語的働きかけを行うだろう。

さて、そのような言語的・非言語的働きかけとして、具体的にはどのような行動が考えられるだろうか。実際に親密な関係を構築した者同士を対象とした研究が参考になるだろう。大坊（1990）によると親密な関係にある者は視線行動、身体接触、発話量などが多いこと、あるいは逆にそれらの行動を示す相手に対して親しみを感じやすいということが分かっている。また松

井（1993, 2000）は恋愛行動の進展に関する模式図にて異性関係でみられる行動を整理しており、友愛的会話、内面の開示、つながりを求める行動、第三者への紹介、協力、プレゼント、一緒に行動、喧嘩、性的行動、婚約を挙げている。

顔見知り程度の異性が相手に対して働きかけたそれらの行動が奏功するかどうかは、受け手の側の認知に依存する。そもそも、受け手が働きかけの背景にある好意に気がつかなければ、関係の進展に繋がらないからである。親密な関係を形成する以前の異性の行動から、相手が自分にどの程度好意を持っているのかを推測するといった「好意の認知」については、これまでの研究では注目されていないようである。本研究では図1のような、顔見知りの異性2者間の相互作用を想定する。まず①顔見知りの異性Xが何らかの言語的・非言語的行動を取ってくる。②その行動の受け手であるY（自分）が、その行動からどの程度相手の好意を認知するのか、また③Xに対してY（自分）がどの程度好意を感じるのかについて検討する。なお、本研究ではXのYに対する実際の好意の有無（あるいは好意の程度）については特に設定しない。現実場面でも、Yにとっては、顔見知り程度の異性XがY（自分）に好意を持っていることが不明な（既知ではない）ことは不自然ではないと思われる。ただしそのような設定のため、Y

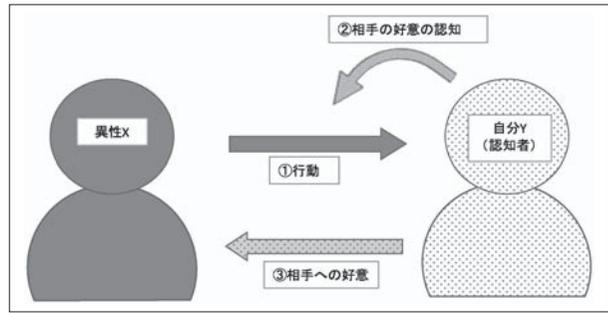


図1 顔見知り程度の異性からの行動に対する認知と好意

の認知が「正確」（例えば、Xが実際に好意を持っていて、Yがその好意に気づく）か、あるいは「不正確」（Xは好意を持っているのにYは気づかない・Xは実際には好意を持っていないのに、Yは好意があると誤解する）かという認知の正確性については検討できない。本研究ではあくまで、異性がある行動を自分にとってきたことに対して、どのように受け止めるかというYの反応（の感性）に焦点を当てている。

ところで、この「好意の認知」には個人差があると考えられる。相手の好意を、ある者は鋭敏に読み取り、ある者は鈍感で気づかないことがある。そこで本研究では、個人差としてソーシャルスキルおよび自尊感情に注目する。ソーシャルスキルとは、「円滑な対人関係を実現するために用いられる熟練した認知や行動の有機的集合体」である（栗林, 2004 b）。堀毛（1991）によると、ソーシャルスキルは「表に現れた行動」「中範囲の能力概念」「高次の抽象過程」の3つのレベルに分類できるが（Spitzberg & Cupach, 1989）、第1のレベルの「行動」は、様々な社会的場面を円滑かつ正常に処理し、課題解決や目標達成につながる行動を意味するとしている。ここに着目した堀毛（1994）は「記号化」「解読」「統制」3つの基本スキル因子を測定する尺度（ENDE2）を作成している。相川・藤田（2005）はENDE2のようなコミュ

ニケーションスキルと、菊池（1988）のような対人スキルを同時に測定する尺度を開発し、「記号化」「解説」「感情統制」「関係開始」「関係維持」「主張性」の6因子を抽出した。本研究ではとりわけ「解説」スキルに注目する。解説能力の高い人は、他者の表出行動から、他者の感情や態度を判断する能力に長けている（堀毛, 1991）。解説スキルの高い者は相手の行動から好意を感じ取りやすいであろう。

もう1つの個人差要因である自尊感情は、「自己への尊重や価値を評価する程度のこと」である（Rosenberg, 1965）。自尊感情の低い者は、そもそも評価の低い自分に異性が好意を寄せるはずがないと思込んでいる可能性があり、自分に対して示す行動の解釈について慎重になると考えられる。

本研究の目的は、顔見知り程度の異性が自分に示してくる行動に対して、どの程度好意を認知するのか、またどの程度相手へ好意を抱くのかについて、ソーシャルスキルと自尊感情の影響を考慮して検討することである。

II. 方法

調査参加者：大学生170名（男性52名、女性118名）。平均年齢は20.01歳（SD=1.01）であった。なお調査は2015年10月に実施した。

質問紙の構成：性別・年齢などの基本的属性の他、以下の尺度に回答させた。

(1)相手の好意の認知：顔見知り程度の異性を思い浮かべ、その異性が自分に対してある行動をとってきたとき、相手からどの程度好意をもたれていると感じるか、5段階（1.好意はない～5.好意がある）で回答させた。行動として、松井（1993）の恋愛行動から26項目を抜粋したものと、接触行動・視線・勧誘・賞賛など10項目を独自に設定した。それらの行動を自分に対して仕掛けてくるという表現にしてある。

(2)相手への好意：(1)の相手の好意の認知と同じ36項目について、それら行動を取ってきたときに自分はどの程度好意を持つかを5段階（1.全く好意をもたない～5.非常に好意をもつ）で回答させた。

(3)解説スキル：相川・藤田（2005）のソーシャルスキル自己評定尺度の解説スキル8項目を4段階で回答させた。

(4)自尊感情：山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度の10項目を5段階で回答させた。

(5)恋愛経験：交際経験の有無（現在恋人がいる、現在はいないが過去に恋人がいた、交際経験がない）、現在恋人がいる人の交際期間、これまでの交際人数、現在の異性友人数を回答させた。

III. 結果

1. 相手の好意の認知の因子分析：

異性の行動から受ける相手の好意の認知尺度36項目について主因子法プロマックス回転による因子分析を行った結果、4因子が抽出された。因子負荷量.450以上の項目を採用したところ、「デートに誘おうとする」「部屋に訪問しようとする」「二人きりで食事に行きたいと誘ってくる」の3項目は除外された。この3項目を除く33項目で再度因子分析を行った結果を表1に示す。第1因子は、「頼ってくる」「近くに座ってくる」「褒めてくる」「笑顔を向ける」など10項目からなり“アプローチ”と命名した（ $\alpha=.95$ ）。第2因子は「求婚してくる」「性交をしようとしてくる」「キスしようとする」など8項目からなり“求婚・性的行動”と命名した（ $\alpha=.94$ ）。第3因子は「家族の話をしてくる」「相談事をしてくる」など6項目からなり“自己開示”と命名した（ $\alpha=.92$ ）。第4因子は「用もないのに会おうとしてくる」「手や腕を組もうとしてくる」など9項目からなり“つながり希求”と命名した（ $\alpha=.95$ ）。以下の分析で

表 1 「異性の行動から受ける相手の好意の認知」尺度の因子分析結果(プロマックス回転後の因子負荷量)

	I	II	III	IV
34. よく頼ってくる	.870	.080	-.010	-.147
24. 近くに座ってくる	.861	-.053	.030	-.051
36. よく褒めてくる	.854	.020	-.020	.011
35. 髪型や服装などのちょっとした変化によく気がつく	.821	.004	.082	-.124
23. 笑顔を向けてくる	.819	-.093	.057	-.017
22. じっと見つめてくる	.758	.089	-.088	.115
33. 秘密を共有したがる	.739	.149	-.143	.094
25. 頻繁に連絡をしてくる	.721	-.016	-.027	.240
26. からかってくる	.660	.001	.124	-.023
17. 仕事や勉強の手伝いをしてくれる	.491	.003	.272	.092
30. 結婚の約束をする	.009	1.001	.028	-.115
29. 求婚してくる	.019	.977	-.009	-.073
31. 結婚相手として親に紹介しようとする	-.034	.929	.046	-.001
27. 性交をしようとしてくる	.134	.695	-.023	-.098
19. キスしようとする	-.189	.665	.017	.379
28. 結婚の話をしてくる	.192	.641	.047	-.076
20. 抱きつこうとする	-.048	.538	.007	.414
21. 恋人として友人に紹介しようとする	.032	.489	.033	.372
5. 家族の話をしてくる	.018	-.046	.880	-.056
4. 子どものころの話をしてくる	-.012	-.023	.859	.013
3. 相談ごとをしてくる	.021	.085	.836	-.010
1. 友人や勉強の話をしてくる	.108	-.040	.835	-.156
2. 悩みを打ち明けようとしてくる	-.035	.144	.821	-.014
7. 買い物に誘おうとする	-.081	.036	.526	.370
13. 用もないのに会おうとしてくる	-.013	-.087	.011	.972
14. 手や腕を組もうとしてくる	-.070	.063	-.019	.924
11. 用もないのに電話をしてくる	.097	-.018	.016	.782
16. 親に紹介しようとする	-.049	.253	-.102	.750
15. BF・GFとして友人に紹介しようとする	-.053	.217	-.141	.721
8. プレゼントをしてくる	.047	-.033	.361	.582
12. 人に見せない面を見せてくる	.244	-.023	.096	.564
10. 肩や体に触れようとしてくる	.437	.033	-.047	.487
6. 寂しい時に話をしてくる	.178	-.098	.338	.457
固有値	16.715	3.439	1.779	1.042
累積寄与率	50.652	61.074	66.467	69.623
因子間相関	I. アプローチ ($\alpha = .95$)	.458	.644	.654
	II. 求婚・性的行動 ($\alpha = .94$)		.363	.675
	III. 自己開示 ($\alpha = .92$)			.639
	IV. つながり希求 ($\alpha = .95$)			

は、各因子を構成する項目の平均得点を用いた。

なお、相手への好意尺度も同じ因子で検討することとし、各因子を構成する項目の平均得点を用いた。各因子の α 係数は、.92 (アプローチ), .97 (求婚・性的行動), .90 (自己開示), .93 (つながり希求) であった。

2. 解読スキルおよび性別が相手の好意の認知に及ぼす影響

異性の行動から受ける相手の好意の認知 4 因子について解読スキル(高群・低群)×性別(男性・女性)の 2 要因分散分析を行った(表2)。

表 2 解読スキルおよび性別の「異性の行動から受ける相手の好意の認知」4 因子の平均値と SD

	スキル低群		スキル高群	
	男性	女性	男性	女性
アプローチ	3.20 (0.84)	3.44 (0.78)	3.54 (0.83)	3.70 (0.85)
求婚・性的行動	4.26 (0.94)	4.34 (0.84)	4.50 (0.61)	4.59 (0.69)
自己開示	3.08 (0.77)	3.37 (0.93)	3.53 (0.86)	3.57 (0.85)
つながり希求	3.65 (1.02)	4.03 (0.86)	4.09 (0.81)	4.31 (0.72)

なお解読スキル要因は、解読スキル得点の平均値20.84 (SD=4.77) で高低群に分割した。その結果、アプローチ、自己開示、つな

がり希求因子で解読スキルの主効果が有意であった ($F(1, 162) = 4.66, p < .05, \eta^2 = .03$; $F(1, 162) = 4.91, p < .05, \eta^2 = .03$; $F(1, 162) = 6.68, p < .05, \eta^2 = .04$)。いずれも、解読スキル高群が低群よりも相手の好意を高く評価していた。またつながり希求因子では、性差も有意で ($F(1, 162) = 4.63, p < .05, \eta^2 = .03$)、女性の方が男性よりも相手の好意を高く評価していた。

3. 解読スキルおよび性別が相手への好意に及ぼす影響

異性の行動に対する相手への好意4因子について解読スキル（高群・低群）×性別（男性・女性）の2要因分散分析を行った（表3）。その結果、自己開示因子で、解読スキルの主効果が有意であった ($F(1, 159) = 5.45, p < .05, \eta^2 = .03$)。解読スキル高群が低群よりも相手の自己開示行動に対して好感を抱くようである。また求婚・性的行動では、性差も有意で ($F(1, 159) = 13.27, p < .001, \eta^2 = .08$)、女性は男性よりも好感を抱かないようである。

表3 解読スキルおよび性別の「異性の行動に対する相手への好意」4因子の平均値とSD

	スキル低群		スキル高群	
	男性	女性	男性	女性
アプローチ	3.26 (1.00)	3.12 (0.76)	3.46 (0.73)	3.45 (0.91)
求婚・性的行動	3.38 (1.45)	2.39 (1.36)	3.52 (1.16)	2.77 (1.49)
自己開示	2.90 (0.81)	3.10 (0.79)	3.26 (0.79)	3.39 (0.86)
つながり希求	3.20 (1.12)	2.88 (0.87)	3.39 (0.89)	3.34 (1.11)

4. 自尊感情および性別が相手への好意の認知に及ぼす影響

異性の行動から受ける相手の好意の認知4因子について自尊感情（高群・低群）×性別（男性・女性）の2要因分散分析を行った（表4）。なお自尊感情要因は、自尊感情得点の平均値27.86（SD=7.61）で高低群に分

割した。その結果、つながり希求因子の、性差のみ有意で ($F(1, 161) = 4.19, p < .05, \eta^2 = .03$)、女性の方が男性よりも相手の好意を高く評価していた。

表4 自尊感情および性別の「異性の行動から受ける相手の好意の認知」4因子の平均値とSD

	自尊感情低群		自尊感情高群	
	男性	女性	男性	女性
アプローチ	3.46 (0.65)	3.43 (0.86)	3.32 (0.98)	3.74 (0.76)
求婚・性的行動	4.49 (0.58)	4.45 (0.87)	4.31 (0.90)	4.52 (0.66)
自己開示	3.51 (0.62)	3.35 (0.95)	3.22 (0.98)	3.61 (0.80)
つながり希求	3.97 (0.53)	4.09 (0.85)	3.83 (1.14)	4.29 (0.72)

5. 自尊感情および性別が相手への好意に及ぼす影響

異性の行動に対する相手への好意4因子について自尊感情（高群・低群）×性別（男性・女性）の2要因分散分析を行った（表5）。その結果、求婚・性的行動のみ性差が有意で ($F(1, 158) = 13.53, p < .001, \eta^2 = .08$)、女性は男性よりも好感を抱かないようである。

表5 自尊感情および性別の「異性の行動に対する相手への好意」4因子の平均値とSD

	自尊感情低群		自尊感情高群	
	男性	女性	男性	女性
アプローチ	3.56 (0.55)	3.19 (0.89)	3.24 (1.02)	3.43 (0.83)
求婚・性的行動	3.65 (1.14)	2.45 (1.49)	3.33 (1.40)	2.76 (1.39)
自己開示	3.27 (0.55)	3.21 (0.91)	2.99 (0.96)	3.33 (0.77)
つながり希求	3.51 (0.65)	3.01 (1.05)	3.18 (1.18)	3.28 (1.01)

6. 好意の認知と相手への好意との関係

各因子における好意の認知と相手への好意との関係を検討するために、ピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、アプローチ因子 ($r = .66, p < .001$)、自己開示因子 ($r = .77, p < .001$)、つながり希求因子 ($r = .36, p < .001$)

において、有意な正の相関が見られた。相手の行動から相手の好意を感じるほど、自分自身の相手に対する好意も高まっていた。求婚・性的行動では有意な相関はなかった ($r=.13$, $n.s.$)。

7. 異性交際状況と好意の認知および好意との関連

参加者の交際経験については表6の通りであった。異性友人数の平均値は男性が14.82人 ($SD=17.64$) で、女性が6.77人 ($SD=10.60$) であった。現在恋人がいる者の交際期間の平均値は男性が18.00か月 ($SD=14.98$) で、女性が12.39か月 ($SD=15.63$) であった。これまでの交際人数の平均値は男性が3.52人 ($SD=2.84$) で、女性が2.87人 ($SD=2.54$) であった。なお相手の好意の認知4因子および相手への好意4因子について、交際経験×性別の2要因の分散分析を行ったところ、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった。

表6 性別の異性交際経験(度数)

	恋人あり	過去に恋人あり	交際経験なし	計
男性	24 (46.20%)	20 (38.50%)	8 (15.40%)	52 (100.00%)
女性	41 (34.70%)	43 (36.40%)	34 (28.80%)	118 (100.00%)

IV. 考 察

本研究の目的は、顔見知り程度の異性が自分に示してくる行動に対して、どの程度好意を認知するのか、またどの程度相手へ好意を抱くのかについて、ソーシャルスキルと自尊感情の影響を考慮して検討することであった。

まず好意の認知の得点を見ると、求婚・性的行動が最も高く、次いでつながり希求、アプローチ、自己開示の順であった。4因子の中でも求婚・性的行動は、松井(1990)の恋

愛行動の進行モデルでも恋愛関係にある者それかなり進行した段階にある者同士がとる行動である。その行動を顔見知り程度の異性が示してくることは、たとえ解読スキルが低い者であっても、相手の自分に対する好意を色濃く反映していると受け取り、解読スキル高群との差がでなかったのであろう。その他の因子の行動は恋愛関係形成以前～関係初期においても見られるもので、この“微妙な”行動の裏に潜む意味を、解読スキルの高い者の方が鋭敏に読み取れているのかもしれない。一方、自尊感情の高低による好意の認知の差はみられなかった。自尊感情の低い者は、異性の行動から自分への好意を感じにくいと思われたが、自尊感情の高い者と同程度には相手の好意を認知しているようであった。本研究の設定では自分は受け手の立場であり、相手が自分に関心を示し何らかの様々な行動を示してくる(と思われる)状況であった。松井・山本(1985)は男子大学生を対象に異性交際の対象選択に及ぼす自尊感情の影響を検討したところ、自尊感情の低い者の方が拒絶への恐れが高かった(受容可能性が低いと思う)と報告している。それ故、自信のない男性は自分を受け入れてくれそうかどうかを重視して女性に好意を寄せるのではと考察している。本研究の状況は、相手の受容可能性がそこそこ高いと自尊感情が低い認知者にも思われたのだろう。自尊感情の影響は、自分が異性に何らかの行動を働きかける立場に立った際に影響するのかもしれない。性差については「つながり希求」で有意であった。「つながり希求」は、松井(1990)のモデルでは主に第2段階にあたる行動で、恋愛関係が成立した手のカップルに好発する行動である。まだ顔見知りの段階にある男性の立場からすると、相手の女性との関係を一步進めるのにこの「つながり希求」に関する行動を取るとはインパクトがあり、女性に自分の好意を強く意識させることができるといえよう。そ

の他、交際経験の有無が好意の認知に影響するか分析をしたが、特に有意な差はみられなかった。交際経験のある者は、一種の異性行動データベースのようなものを蓄積していると考えられる。ただしそれは個人的な経験ゆえ、例えば同じ「近くに座ってくる」という行動でも自分への好意があった場合となかった場合とが混在していたため、データベースの多寡による差を生ずるには至らなかったであろう。

次に相手への好意得点をみると、解読スキル、自尊感情、交際状況の影響はほとんどなく、どの因子も中程度の得点であった。ただ解読スキルの影響が「自己開示」でのみ有意であった。「自己開示」は松井（1990）のモデルでは第1段階であるので、その行動の背景に行為者の好意を見いだすことはやや難しいといえよう。この因子では、好意の認知についても解読スキルの高い者は高く評定しており、好意に気づいたからこそ返報として、自分も相手へ好意を示すことができると思われる。あと「求婚・性的行動」で性差が有意であった。女性はそのような行動に対してどちらかという好意を持たないようである。松井（1990）は、恋愛進行度別に恋愛感情の高まりを男女で比較しているが、男性が進行初期に急激に恋愛感情を高めるのに対し、女性は進行後期に向け徐々に恋愛感情を高めていた。女性は、恋愛関係にある者同士でもかなり進行した段階にある行動を顔見知り程度の異性が示すことに、警戒心を抱いたと思われる。女性の感情の高まりに適した行動を徐々に取ることが好意を獲得するためには必要といえよう。

行為の者の立場から、受け手の好意を獲得するために注意すべき点について、好意の認知と相手への好意との相関の結果は参考になるだろう。「自己開示」「つながり希求」「アプローチ」の3因子では、受け手が好意を認知すると行為者への好意へ繋がるという返報

性がみられたが、「求婚・性的行動」では相関がなく行為者への好意には繋がっていない。その時の2者の関係性に合った節度ある行動を取り、受け手に好意を伝達できれば、受け手からの好意の返報を得られる可能性がある。

今後の課題として、まず第1に、「認知の正確性」に注目した検討を行うことである。本研究では、参加者は受け手という立場（認知者）で、所定の行動が異性からなされた想定して回答させている。この場合「相手の異性はあなたに好意がある（or ない）ようです」などと、事前情報（正解）を与えることは質問の性格上できない。現実場面でも、相手が自分に好意があるのかわからないか不明のまま、相手の行動の真意を探ることはあるので、本研究の設定は不自然ではないだろう。しかし、本研究で、解読スキルの高い人の方が相手の好意を認知しやすいという結果がいくつか得られたが、それが「正しく」認知した結果なのか、「誤解して」過大に認知した結果なのかは不明瞭である。実際に恋愛関係を構築したペア両者に、関係初期当時の相互作用についてインタビューを行うなどデータ収集に工夫が必要である。

第2に、好意（like）と恋愛感情（love）を厳密に分けて検討する必要がある。本研究では、異性が自分に対してある行動をとってきたとき、相手からどの程度「好意」をもたれていると感じるかを問うているが、参加者によってはこの言葉を、“like”の意味で捉えた者と“love”の意味で捉えた者が混在している可能性がある。恋愛関係の萌芽に関する研究と考えると、恋愛対象としての“love”の認知がなされるかが重要であるので、質問紙の教示において「好意」の定義の説明を加えるなど工夫が必要である。

[付記]

本研究の実施にあたり、高安早織さんの協力を得ました。記して感謝いたします。

本研究の一部は、日本社会心理学会第57回大会で発表された。

[引用文献]

- Ackerman, J.M., Griskevicius, V., & Li, N.P. (2011). "Let's Get Serious: Communicative Commitment in Romantic Relationship." *Journal of Personality and Social Psychology*, 100(6), 1079-1094.
- 相川 充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成, 56, 87-93.
- 大坊郁夫 (1990). 対人関係における親密さの表現—コミュニケーションに見る発展と崩壊, 心理学評論, 33(3), 322-354.
- 橋本 剛 (2002). 片思いの求愛者と拒絶者に対する対人認知-仮想場面法による第三者評定-対人社会心理学研究, 2, 15-23.
- 樋口匡貴・磯部真弓・戸塚唯氏・深田博己 (2001). 恋愛関係の進展に及ぼす告白の言語的方策の効果 広島大学心理学研究, 1, 53-68.
- 堀毛一也 (1991). 社会的スキルとしての思いやり 現代のエスプリ, No. 291, 150-160.
- 堀毛一也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34(2), 116-128.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—高社会的行動の心理とスキル 川嶋書店
- 栗林克匡 (2002). 恋愛における告白の状況と個人差 (シャイネス・社会的スキル) に関する研究 北星論集 (社会福祉学部), 39, 11-19.
- 栗林克匡 (2004a). 恋愛における告白の成否の規定因に関する研究 北星学園大学社会福祉学部北星論集 41, 75-84.
- 栗林克匡 (2004b). 社会的スキルとは 川俣甲子夫 (編著) 社会心理学—臨床心理学との接点 八千代出版, pp. 123-127
- Levinger, G. (1983). Development and change. In H.H. Kelley, R. Berscheid, A. Crispien, J.H. Harvey, T.L. Huston, G. Levinger E. McClintock, L. A. Peplau, & D. R. Peterson (Eds.) *Close relationship*. San Francisco: Freeman, 315-359.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33(3), 355-370.
- 松井 豊 (1993). 恋ごろの科学 サイエンス社
- 松井 豊 (2000). 恋愛段階の再検討 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 92-93.
- 松井 豊・山本真理子 (1985). 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響 社会心理学研究, 1 (1), 9-14.
- 中山 真 (2009). 恋愛感情の告白段階における第三者の役割—情報源の信憑性が説得効果に及ぼす影響—東海心理学研究, 4, 9-17.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Spitzberg, B.H. & Cupach, W.R. (1989). *Handbook of interpersonal competence research*. NY: Springer.
- 菅原健介 (2000). 恋愛における「告白」行動の抑制と促進に関わる要因—異性不安の心理的メカニズムに関する一考察— 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 230-231.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.